

1、ふれあい読書

本校では、朝読書の時間に、6年生が1年生に読み語りをする「ふれあい読書」に取り組んでいる。年度当初に編成される縦割り班の1年生と6年生が、ペアとなつての読み語りである。これは、学校図書館司書が配置される以前から取り組んでおり1年生が学校に慣れてきた2学期から行っている。

6年生は、事前に読み語りの本を準備するのだが、本校の学校図書館での貸出は1冊である。そこで、6年生だけは、特別にふれあい読書用としての枠を設けて、本の貸出を2冊に設定している。1年生に喜んでもらうために、どんな本を選んだらいいのか自分で考えたり、友だちと情報交換をして本を交換したり、学校図書館司書に相談したりして、選書には気を配っている。また、1年生が楽しめるように、真剣に耳を傾けてもらえるように、練習もきちんと行って、読み語りに臨んでいる。

毎週金曜日の朝読書の時間に、6年生が1年生の教室に出かけ、自分のペアになる1年生を見つけると、自分が本を読んであげたい場所（教室の隅、廊下、階段等）へ連れて行って、読み語りをしている。



階段で読み語り



廊下で読み語り



教室のロッカーの前で読み語り



6年生も1年生も笑顔いっぱい

ふれあい読書後に、6年生は読書の記録カードに、期日・本の題名・読書後の感想を書きとめるようにしている。1年生の様子や、本についての1年生の感想等も書いており、読み語りへの意欲や思いが感じられる。また、このふれあい読書を通して、1年生と6年生の交流が深まっていく。廊下で出会ったときに声をかけ合ったり、休憩時間に互いに教室を訪れていっしょに遊んだりすることも増える。例年、6年生を送る会で、6年生との別れを惜しんで泣き出す1年生も見られるほどである。このふれあい読書は、1年生にとっても、思い出深い活動になっている。

他の学年についても、年に1回程度「ふれあい読書」を行っている。以前は、5年生と2年生のペア、4年生と3年生のペアで行っていたが、3年生と4年生では、年齢が近すぎてやりにくいのでは、という声が

あり、今年度は、5年生と3年生、4年生と2年生のペアで行った。時期は、秋の読書週間に合わせ、1年生と6年生が行っている金曜日の朝読書の時間に実施した。ちょうど本の貸出冊数を2冊に設定していたため、4年生と5年生は、その1冊をふれあい読書用として借りることができるようにした。

4年生と5年生も、6年生と同様に事前に本の準備をし、読み語りの練習を行ってから、それぞれがペアとなる縦割り班のメンバーの教室へ出かけて、読み語りをを行った。4年生も5年生も、1年生のときに6年生からふれあい読書で読み語りをしてもらっているのです、スムーズに読み語りに臨んでいた。



5年生が3年生に読み語り



5年生は、一生懸命です。



4年生が2年生に読み語り



4年生は楽しそうに、2年生は真剣に

読み語り後、あのねノートや作文帳にふれあい読書のことを書いていた子どもたちもいた。下学年の子どもたちは「とても楽しかった。」「おもしろかった。」という感想を書いている他に、上学年が上手に読み語りをする姿に「自分もあんな風になりたい。」とあこがれる気持ちを抱いた子もいた。上学年は「緊張したけど、真剣に聞いてくれる姿に緊張がほぐれた。」「練習どおりにうまくできてよかった。」「『おもしろかった。』と感想を言ってくれてうれしかった。」等、達成感をもったようである。また「次もおもしろい本を用意して読み語りをしたい。」という思いを持った子どもたちも多かった。

1年生と6年生のように、2、3、4、5年生の関わりも深まったようで、掃除場所で本の話題が出たり、廊下ですれ違うときに声をかけたりしているようである。

担任の先生方も、そんな子どもたちの様子を学級便りに紹介したり、ぜひまた3学期にもしたい、と司書教諭に声をかけてくださったり、好評だった。3学期の校内読書週間に実施する計画を立てている。

2、読み語り

本校では、昨年度から毎朝8：20～8：30は読書に取り組んでいる。読書のしかたは、曜日によって異なり、次のように設定している。

- ・月曜日・火曜日・木曜日 … 一人読み（自分が読みたい本を読む。）
- ・水曜日 … 担任以外の教員（管理職・専科）や図書ボランティアによる読み語り
- ・金曜日 … 担任による読み語り

水曜日については、司書教諭が読み語りカレンダーを毎月作成し、各学級に誰が読み語りに来るのが分かるようにしている。読み語りカレンダーの作成手順は、次の通りである。

- ① 司書教諭は、学期ごとに、校内の担任以外の教員がどの学級で読み語りをするのかを決定する。その際、職員室に待機する教員も残すようにするとともに、できるだけ同じぐらいの頻度で読み語りをしてもらうように配慮して作成する。
- ② 図書ボランティアの定例会（毎月第4土曜に開催）で、図書ボランティアがどの学級で読み語りをするのかを決定し、司書教諭にその一覧表を渡す。
- ③ 図書ボランティアから受け取った一覧表を見て、読み語りカレンダーを作成する。
- ④ 印刷して、全教職員に配布する。

担任以外の教員と図書ボランティアの人数よりも学級数の方が多いため、低学年・中学年・高学年でローテーションを組んで行い、読み語りに来る人がいない学年については、担任が読み語りをしたり、学年内で担任同士が入れ替わって読み語りをしたりしている。

学校図書館の本を教員や図書ボランティアが利用できるように、個人カードを作成して貸出を行っている。大休憩や昼休みに子どもたちと一緒に並んで本を借りていく教員の姿も見られる。



校長・教頭・担任外の教員による読み語り



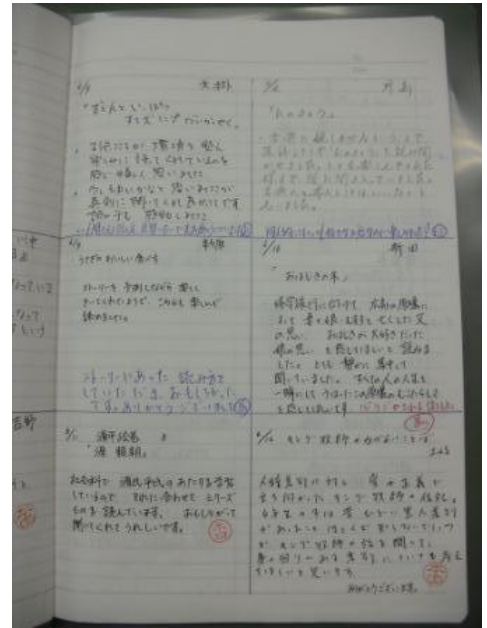
図書ボランティアによる読み語り



読み語りを行った後に、どんな本を読み語りしたのかが互いに分かるように、教員・図書ボランティア・担任が記録するノートを各学年で用意している。



各学年の読み語り記録用ノート



記録内容

以前は、図書ボランティア用の読み語り記録ノートがあったが、教職員が目を通すことはなかった。読み語りがあるようなスタイルになった昨年度から、図書ボランティアのアイディアにより、上の写真のような読み語り記録用ノートを使用するようになった。

水曜日に読み語りをしてもらった際には、図書ボランティアが各自で記入する他に、担任外の教員に回覧して記入をしてもらう。その後、司書教諭が各学年にノートを配布し、担任がノートの記録を確認し、押印したりコメントを簡単に記入したりして、読み語りについての連携が図れるようにしている。また、金曜日の読み語り後に、担任も同様に記録を残すようにしている。

以前のように図書ボランティアだけの読み語りでも、子どもたちは楽しみにしていたのだが、教員が参加するようになり、より多くの本に触れることができるので、子どもたちはとても喜んでいて、また、普段接することのない教員と関われることも、楽しいようである。気に入った本は、学校図書館で探して借りる子どもたちの姿も見られる。

教員自身も、読み語りを楽しみにするようになってきている。学校図書館の本以外にも、かつて我が子に読み聞かせをしていた本を持参する等、それぞれに選書にも配慮が感じられる。昔を思い出して、懐かしい気持ちになった、と話をされたこともあった。

3、図書祭り

図書祭りは、読書週間の一環として行っている本校では恒例の活動である。今年度は、12月1日（水）と12月3日（金）に行った。図書委員会を中心に、図書ボランティアや本校の教職員にも協力していただいて取り組んだ。

○事前準備

図書委員会では、1学期の終わりから図書祭りの準備に取りかかった。図書館にできるだけたくさんの人に来てもらう、図書館の本に興味・関心をもってもらう、本をたくさん借りてもらう、ということをねらいにして、どんなことをするのか、ということを中心に話し合った。その結果、次のように決定した。

- ・ 図書祭りを知らせるポスター作り
- ・ 各コーナー（しおり作り、こわい話、マジックショー、スタンプラリー、あてくじ、手作りミッケ、読書ビンゴ、クイズ&なぞなぞ、本の紹介）の準備
- ・ 各コーナーの看板作り

より多くの人に図書祭りに来てもらうため、ポスター以外に昼の放送を利用して図書祭りについて知らせたり、各学級に案内のお手紙を配布したりして、PR活動も行った。司書教諭も教職員の理解と協力が得られるように、職員会議で提案して図書委員会の支援を行った。

○図書祭り当日

図書祭りのある週は、本の貸し出しを1人2冊とした。これを機に本をたくさん借りてもらう、読書の楽しさを感じてもらおうというねらいであった。ねらい通り、たくさん子どもたちが本を借りに来て、廊下にまで長い列ができた。



本を借りる長蛇の列



各コーナーに殺到している様子

いつも大人気のしおり作りコーナー



畳のコーナーで、図書委員会が準備した切り絵を貼り付けて、ラミネートして作ります。



<読書ビンゴのコーナー> (添付資料5-⑭)

各学年のお薦め本をビンゴにして、借りてもらうようにした。ただ、冊数が少なかったため、取り合いになってしまい、ビンゴになったカードは、思ったより少なく、残念がる子どもたちも多かった。ビンゴになった子には、3学期の校内読書週間で使える特別券をプレゼントした。

<スタンプラリーコーナー>

図書祭り期間中に、本を1冊借りるごとにスタンプを押してもらえる。6冊借りると、ごほうびにしおりをプレゼント。

(添付資料6-⑮)

<あてくじコーナー>

図書祭り期間中に、本を借りたら、あてくじを引ける。当たりは、しおりをプレゼント。はずれでも折り紙で作ったものがもらえる。



<手作りミッケコーナー>

広告の紙を切り取って画用紙に貼り付け、問題を作った。初級・中級・上級用があり、規定の時間以内に解くようにしている。



<本のクイズ・なぞなぞコーナー>

図書館にある本の中から、問題を作り、解いてもらう。図書委員も色々な本を読んでおかないと問題ができないので、なかなか大変だった。問題に正解したら、折り紙で作ったものをプレゼント。

<本の紹介コーナー>

みんながあまり借りていないけれど、実はとてもすてきな本の紹介をして、みんなに読んでほしい、という思いからできたコーナー。「読み終わると、『その本が借りたい。』という声をたくさん聞いた。」とうれしそうに話した担当者。



<マジックショー>

図書委員会で相談したとき、「マジックショーが、図書祭りとどう関係があるんですか？」と反対意見が出たコーナーだったが、「図書館のマジックの本に紹介されているマジックを見せる。」という考えに実現したコーナー。人が集まるのか心配されたが、人気のコーナーだった。まだマジックをするのに「その本を借りたい。」と言われて困った、と担当者談。



<こわい話コーナー>

とても人気のあるコーナーなので、大混雑を避けるため、大休憩に整理券を配布。定員を 50 人に設定したが、あっという間に、整理券はなくなってしまった。



真っ暗な中で、N 先生が懐中電灯で手元を照らしながら、臨場感たっぷりにこわい話をしているところ。



例年、図書祭りには、図書ボランティアにも協力を依頼して、第一音楽室で読み語りを行っている。今年度はこわい話と重なり、例年よりも参加した子は少なかったが、みんな話に聞き入っていた。いつも、最後まで聞いた子には、図書ボランティアが手作りしたプラ版のキーホルダーが配られる。今回も、子どもたちは宝物のように大切に持ち帰っていた。

○図書祭りを終えて

図書祭りを終えると、図書委員会の子どもたちにふりかえりカードを書かせる。委員会で準備するだけでは間に合わず、休憩時間に集まったり、家でプレゼントを作ってきたり、グループの友だちと協力して自主的に取り組んでいる。そのため、子どもたちは、大きなイベントを無事に終えた充実感・満足感・達成感を持つようである。また、この経験により、子どもたちは図書委員としての自覚を深め、その後の委員会活動に臨む姿勢も変わってくる。当番でなくても図書館にやってくる、自主的に本の整頓をしたり、本の配置や分類に興味を抱くようになったりするのである。図書祭りは、図書委員会の子どもたちを育ててくれるイベントでもある。

4、校内読書週間

毎学期1回、校内読書週間を設けている。1学期は、春の読書週間に合わせて実施し、その期間は学校図書館の本を2冊借りることができるようにしている。図書ボランティアによる読み語りコーナーも、ノー掃除の昼休みをお願いしている。春は、図書委員会が始まって間もないため、委員会の子どもたちは、図書館にある「ミッケ」「セブン」の本を使ったクイズやこわい話を実施している。



たくさんの子どもたちが聞き入っている



大型絵本での読み語り



「セブン」で間違い探し

「こわい話をしたい。」と計画したところ、メディアルームに入りきれないほどの人が殺到。教室は蒸し風呂状態になり、危険を感じて、入場制限を急遽することに…。入れず不満をこぼす子も数知れず。



2冊貸出になり、みんなが殺到。廊下の先まで列が続いている。

スタンプラリーも行ったところ、毎日本を借りに並ぶ子どもたちも多かった。読書週間期間中に6冊借りると、ごほうびとして特別券を配布した。



今回の校内読書週間で、子どもたちがこわい話を聞いたがっていることが分かったので、特別券に、「こわい話にごしょうたい」券を作った。右の写真は、その特別券をもらった子どもたちである。お話の上手なN先生によるこわい話に、耳をふさいだり、友だちと抱き合ったりしながら聞いていた子どもたち。

2学期は、前出の図書祭りを実施している。秋の読書週間と合わせて行いたい、校内行事（音楽会）と重なり、実施が難しいために時期はずれる。ただ、秋の読書週間にも本に親しむ活動を行いたかったため、今回は、この時期にも学校図書館の本を2冊借りられるようにするとともに、全校でふれあい読書を行った。

3学期は、子どもたちの「本を2冊貸してほしい。」という要望が多いため、設定した。本を2冊借りることができるようにするとともに、図書ボランティアによる読み語りコーナー、教員によるこわい話のコーナーを設ける予定である。

5、その他

子どもたちに図書館の本をたくさん読んでもらうために、学期ごとに多読の子どもたちを表彰している。全校の前で表彰されることは、子どもたちに励みになっているようである。特にたくさん読書した子どもたちには、本の購入券（図書館に置いてほしい本が買ってもらえる券）を渡している。

また、年度末には、100冊以上図書館の本を借りた子どもたちを表彰するとともに、図書館に多読賞として掲示している。

6、おわりに

ささやかな実践であるが、本校の取り組みについて紹介した。10年以上前から本校の読書活動に協力している図書ボランティア、4年前から配置された学校図書館司書、昨年度から朝自習を全て朝読書にと全教職員に働きかけ、実現させた管理職、そして、図書館や本に熱心に取り組んでいる様子を日頃から司書教諭に伝えてくれる教職員、とたくさんの方の協力により、子どもたちが本に親しみ、学校図書館で本を借りるのを楽しみにしてくれるようになった。本の貸出冊数も、年々伸び、学校図書館司書が配置される前の貸出冊数の約3倍に達しようとしている。

また、毎日朝読書に取り組むことにより、登校すると自然に本を手に取り読書に向かう子どもたちの姿が見られるようになった。読書が定着してきたことを実感している。保護者からも「毎朝10分間の読書を学校で確保してもらっているの、時間で区切った読書ができるようになってきました。成長を感じています。」という声もいただいた。

この取り組みを今後も継続しつつ、さらに子どもたちが本に親しみ、読書が子どもたちの生活の中にしっかり根ざしていくよう、様々なアプローチをしたいと考える。